

講演「教授は踊る—伝統文化体験から見る日韓相互理解深化の必要性」

(要旨、日韓文化交流基金 NEWS72 号に掲載)

2014年9月26日

大澤文護氏(千葉科学大学教授・毎日新聞客員編集委員)

類似性ばかりが目について

私が最初に韓国に住んだのは1989年でした。88年にソウルでオリンピックが開かれ、「漢江の奇跡」と呼ばれた高度経済成長は「急上昇」の時期を迎えていました。ソウルには現代、起亜の小型自動車やサムスンやLGの電気製品があふれていました。「韓国のことを今から勉強しておけば、必ず役立つ」という父の親友の韓国の大学教授の勧めで、私は会社を退職して「語学留学」に旅立ったのです。

韓国語の基礎さえ知らずにソウルに行ってしまった私は、当初、学校と下宿を歩いて往復するだけでした。下宿に帰っても話す相手さえなく、食事の時間になれば下宿のアジュマが2階に上がってきて、モノを食べるまねをする。そんな生活をしていました。

しかし、韓国語を少し勉強し、ハングルを多少理解するようになると、日本語との類似性ばかりが目につくようになります。やがて、あまりにも類似点が多いので、自分は韓国を理解できたような錯覚に陥ってしまうのです。たとえば欧米について、日本人は、簡単に「相互理解」だとか「国際協力」を語るのでしょうか。顔かたち、風土、生活様式、すべてが、あまりにも違うので「相互理解」「国際協力」を主張する前に、相手のことをよく研究しなければならないと考えるのではないのでしょうか。

20年近く、朝鮮半島を勉強し、記事を書き、今は大学で教え、時折、講演をしながらも、いつの間にか、朝鮮半島を100%理解した気になっていたのではないか…。ソウル特派員としての仕事が、仕上げの時期にさしかかった2012年、日韓併合100年の「節目」の年を韓国で迎えたとき、なぜ、年間500万人もの人々が行き来する日韓の間で、今も、気持ちのすれ違いや、相互不信が噴出するのか…。その理由に思い悩んでいたとき、出会ったのが韓国伝統舞踊だったのです。

日韓文化の相違を体験

最初のレッスンのことを今も忘れません。

「大澤さん、足はかかとから床に着けてください。頭の中に3連符を思い浮かべてください。ひざを柔らかく。手は常に円を描くように、ゆったりと動かしてください」

しかし、私が足を動かすと必ず、つま先から床に着いてしまう。頭の中に3連符を思い浮かべながら体を動かしているつもりが、いつの間にか先生の動きとずれてしまう。手は円を描くどころか、上下左右にばたばたと大きく早く動いてしまう。

「それじゃ、足は田植え踊りですね。手は盆踊りですね」

先生は笑いながら、注意してくれましたが、拍子・リズムのことになると「うーん」と言ったきり、何も注意してくれません。3連符といっても、韓国伝統舞踊の3連拍は、同じ調子で続く、西洋音楽のような3連符ではありませんでした。3つの拍の中のどれかが長く伸び、どれかが短くなる。それが不規則に、まるで音が風に吹かれて揺れる様に、自由自在に変わっていくのです。これ以上は、専門家ではない私の説明能力を超えています。しかし、伝統音楽、伝統舞踊に親しんでいくうちに「ああ。これは朝鮮半島の風土が生んだ、独特の芸術なんだな」ということが分かるようになってきました。

日本と韓国の風土はまったく異なる。そんな国を理解するには、生半可な勉強では間に合わない。格好良く言えば、伝統舞踊のけいこは、私にそんな気を起こさせてくれたのです。私にとって、伝統舞踊を習うことで、はじめて韓国文化を身をもって発見したという気にさせてくれたのです。こんなことを言うのは、格好が良すぎるでしょうか。でも、私の本心なのです。

剣舞と日韓交流

さて、ここで、日韓双方の伝統芸能を身に着け、まったく異なる文化に根ざした両国伝統芸能の融合の試みをご紹介します。朝鮮半島にも古来、剣舞が存在しました。「花郎(ファラン)」文化が開いた新羅時代には、勇ましい、実戦的な剣舞が存在したと考えられています。新羅の青少年たちはグループを作り、有名な山や川など、自然の中で共同生活をしながら、智、徳、体の全人的な教育を受けるようになります。新羅の真興王はその青少年たちを花郎党として国家的に体系化し、国家のための人材を養成しました。新羅の花郎たちは自然の中で、体や心を鍛え、歌や舞、弓や剣術を習いました。彼らは新羅の三国統一の決定的な担い手になります。

しかし、武より文を重視した李朝時代になると、実戦的な剣舞は姿を消し、宮廷に仕える宮女たちの手で、短剣を使った華やかな剣舞が踊られるようになりました。その一部が李朝崩壊後も韓国南部・晋州^{チンジュ}に伝わり、「韓国重要無形文化財第 12 号晋州剣舞」として現代に残っています。

先ほど、ご覧にいった剣舞は、私の踊りの師匠、李周熙教授が今に残る剣舞に古代剣舞の要素を入れて再構成したものです。さらに、韓国の伝統芸能にはストーリー性がほとんどありません。様式化した踊りがほとんどなのですが、李教授はそこにストーリー性を持ち込み、現代人も関心を持つことができる舞踊の創作を思い立つのです。それが「南怡幻想」でした。

その時、参考にしたのが、長剣を使う実戦的な日本の剣舞であり、ストーリー性の面でモデルにしたのが、日本の歌舞伎や人形浄瑠璃でした。



李周熙教授の指導のもとで稽古中の大澤氏

日本式住宅とオンドルの融合

もう一つ、舞踊とは全くことなる日韓文化融合の例をご紹介します。

韓国南西部・全羅北道の群山市に残る、「旧広津家屋」と呼ばれる文化財です。この家屋はまったくの日本式住宅です。この住宅が韓国に出来た経緯を説明するとき、避けて通れ

ないのは、日本の植民統治支配です。

群山は日本の植民統治時代、コメの積み出し港として栄え、数千人の日本人が住んでいました。その時代に建てられた 170 棟の建築物が、ほぼ、当時のまま残っています。日本の植民統治の狙いの 1 つは、食糧確保でした。朝鮮半島の食糧不足にもかかわらず、大量のコメを日本に運び出した群山は、現地の人々にとって植民統治の象徴的な場所でした。

かつて朝鮮半島全域に残っていたはずの、こうした日本家屋は、朝鮮戦争の戦火や、韓国の高度経済成長に伴う開発で、ほとんどが姿を消しました。群山は、高度成長に乗り遅れた街でした。しかし、そのせいで、群山には他の地域より多くの植民統治時代の建築物が残りました。地元の方々にとっては、忌々しい建物だったはずですが。

しかし近年、そうした雰囲気に変化が現れています。2007 年、群山市は条例を制定し「歴史文化建築物」の指定家屋には最高 1000 万ウォン（約 100 万円）の改修補助金を出すことを決めました。群山市内で、もっとも保存状態が良いとされる「旧広津家屋」は、市が直接資金を出して改修し、文化財として一般公開しました。

地元の群山大学の研究者が建物を調査したところ、純日本式とみられた「旧広津家屋」の床下から、朝鮮半島独特の床下暖房施設であるオンドルの遺構が見つかりました。この研究者は「日本の植民統治の象徴である日本式住宅から、朝鮮半島の気候に合わせて改良された跡が見つかった。この建物は日本式住宅と韓国の伝統暖房施設が融合した、群山独特の歴史的建築物であると考えれば、この建物を我々（韓国の研究者）が調査し、保存していく意味はあると思う。そのためにも、ぜひ、日本の専門家と協力したい」と語ってくれました。

植民統治時代の朝鮮半島の実情を日韓両国の専門家が力を合わせて解明する一。少なくとも韓国側には、そうした学術協力を受け入れようという研究者たちの思いが少しずつだが、強くなっていました。そこに、歴史観を超えて日本の専門家が協力する体制を整えば、日韓関係に関係する様々な分野で、これまで解き明かされてこなかった事実が明らかになるのではないかと。「わかったつもり」「知っているつもり」が一番、危ないのです。ここに見えた皆さんは、韓国に関心を持っているの方々でしょう。それぞれの関心分野で懸命に、そして楽しく、韓国を学んでおられることでしょう。その努力を、どうぞ、たゆむことなく、お続けください。「分かった」と思っても、勉強を続けていただければ、再び「何で、韓国はこうなの」という疑問が出てくるはずですが。そして、ここにおられる、日韓文化交流基金の皆様が、日本に住むわれわれの「なぜ」「どうして」を解決するための、やさしい案内役となってくださることをお願いしたいのです。



全羅北道群山市に今も残る「旧広津家屋」